
月夜に金平糖

みえさん。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月夜に金平糖

【Nコード】

N5927B

【作者名】

みえさん。

【あらすじ】

それは金平糖のような昔の記憶。

六月に入ると和菓子店「彩菓」の店先に「あじさい」というきんとんの和菓子が並ぶようになる。

うつすらと色づいた白あんの周りに賽の目に切った琥珀が飾られている。梅雨に良く目にする紫陽花をそのまま和菓子にしたような可愛らしい生菓子だ。

このきんとんは六月上旬しか置いていない。下旬になると「あじさい」は葛を使った透き通った青と紫の和菓子に変わるのだ。

小さい頃、十円玉を握りしめて駄菓子屋に走っていたころからこの店はある。そのころ上生菓子は高級品で子供にはとても手の出せる食べ物ではなかった。あの頃は外から眺めるだけで入ることすら無かった憧れの店。

その反動だろうか。

五十歳を過ぎた今、何度もこの店に顔を覗かせている。

「ああ、金盛さん。いらっしやいませ」

「あら、大旦那、こんにちは」

「こんにちは。暖かくなりましたね、今日はお茶会ですか？」

瑞枝はええ、と頷いた。

大旦那がそう言ったのは瑞枝が着物を着ていたからだろう。普段は洋服だがお茶会の陽だけは着物を着る。彼もよく知っていることだ。

「珍しいこと、大旦那が店にでているなんて」

瑞枝は揶揄するように言った。

「たまにはこちらに出ていないとお客様に忘れられてしまいますから」

そう言って彼は笑う。

大旦那はそろそろ七十を過ぎるあたりだ。和菓子職人というどこか気むずかしそうな雰囲気など無く、優しく柔和な顔立ちをしてい

る。

白髪交じりの長い髪を総髪にまとめ上げ、和服も綺麗に着こなしている老人は、背筋をしゃんと伸ばし立っている為、同年代の人よりも若々しく見える。今は皺が多くなった顔も、細面で若い頃は随分と美男子だったことが想像できる。

瑞枝はこの大旦那が好きだった。

もちろんそれは恋ではない。

ただそれによく似た憧れのような、好感を抱いているのだ。

お茶の世界に一步踏み入ったのもこういった日本人独特の落ち着いた雰囲気が好きだったからかもしれない。

お茶会用の和菓子的人数分注文して待つ間、生菓子以外のお菓子が置かれている棚を見て回った。

色鮮やかなガラスケースの中とはちがい、棚にあるのは焼き菓子が多いため色が単調になる。

その中で、きらきらと輝いて見えたのは金平糖の包みだった。

青と、紫と、緑と、白の金平糖が混ざり合っている。

紫陽花をイメージして作ったのだろう。

どこか懐かしい可愛らしいお菓子に、瑞枝は小さい頃の事を思い出していた。

幼い頃、瑞枝は迷子になったことがあった。

まるで自分の庭のように遊び回っていた山の中で、道に迷ったのだ。今までにも何度も道に迷い、すぐに元の道を見つけていた瑞枝は今回もすぐに帰れるだろうと高をくくっていた。

だが、陽が落ち暗くなった山道は、いつもの知っている風景とはまるで違っていた。

だんだんと心寂しくなり、鳥の鳴き声でさえまるで化け物の声の

ように聞こえていた。

「おかあさん、おとおさん」

大声で叫んでも、来る気配なんかない。

お腹が空いて、ますます心細くなった。

歩き通したために傷だらけになった足も痛い。

空を見上げても曇っていて星の灯りすらみえない。

真っ暗闇。

瑞枝を観察するように見つめる動物の目だけが怪しく光っていた。

「怖いよ・・・おかあさん」

鬱蒼と覆い茂る山の中で瑞枝はとうとう蹲ったまま動けなくなってしまった。

どのくらいの間そうしていただろうか。

五分か十分、そのくらいだったのだろう。

だが幼い瑞枝には何日もそうしているかのように思えた。

不意に誰かに呼ばれた気がして視線を上げると、遠くでちらちら

と何かが光って見えた。金色の光、優しい提灯の灯り。

瑞枝は立ち上がって叫ぶ。

「助けて・・・助けて！」

灯りがゆらゆら揺れながら近付いてくる。

瑞枝ははっとして身を固くした。

ひよっとしたらオバケじゃないのか。

このままどこかに連れさらわれるんじゃないか。

金の灯りはどんどんと近付いてくる。

（どうしよう、逃げなきゃ。でも、知っている人かもしれない）

瑞枝は迷った。

オバケなら逃げてもきつと追いかけてくる。

どうせ捕まってしまうなら、何もしないほうがいいかもしれない。

目を瞑って、瑞枝は待った。

程なくして、目の前がぼうつと明るくなる。

「・・・みずえちゃんだね」

男の人の声だった。

お父さんよりもう少し若いくらいの優しい男の人の声。
仄かに甘い匂いがした。

瑞枝はそつと目を開いた。

知らない人だった。

だけど、とてもオバケのようには見えなかった。

「心細かっただろう、大丈夫だよ、すぐにみんなのところに連れて行ってあげるから」

「・・・」

瑞枝は口がきけなかった。

どう答えて良いのか判らなかった。

みんな、は家族のことだろうか。

それとも、オバケの仲間のことだろうか。

瑞枝の周りの大人たちは、野良仕事をしているために日に焼けごつごつとした岩のような肌をしている。

目の前の男の人は、何だかその人達とは随分と違って見えたのだ。
日に焼けていない真っ白な肌、柔らかそうで、少し当たっただけで壊れてしまいそうだ。そして、男の人なのに、随分綺麗な人に見えた。

もし、オバケにこういう綺麗な人がいるなら、こういう人が瑞枝をあつちの世界に連れて行くというのなら、それでもいい気がした。
男の人は口のきけない瑞枝を優しく撫でて微笑んだ。笑った口の端に小さなえくぼを作る。

本当に、他の大人達と随分と違う人だ。

彼は瑞枝に提灯を握らせて瑞枝を背負って歩き始めた。

やっぱりお父さんに比べるとそんなに大きくない背中。

さらつとした柔らかいシャツ。

香るのはお菓子のような優しい匂い。

「みずえちゃん、ちよつと胸ポケットの中のもの、出してくれないかい？」

「……」

瑞枝は言われるままに、彼の胸ポケットを探った。
小さな布でくるまれた何か固いものが出てくる。

開くと、金平糖だった。

「こんぺいと？」

「うん、食べて良いよ」

「……」

「僕ね、食べ飽きたから、みずえちゃん、食べちゃってくれないかな？」

「……いいよ」

瑞枝は頷いて金平糖を口に入れる。

蜜のような柔らかい味が口の中に広がった。

仄かに花のような香りもする。

「……ああ、晴れてきた。月明かりがあると、助かるね」

瑞枝は空を見上げた。

雲に隠れたまん丸の月が、そつと顔を覗かせている。

柔らかい金の光がさらさらと落ちてくる。

瑞枝は男の背中で揺られて次第に眠くなってきた。

暖かい。

そのまま、瑞枝は眠りへと落ちていった。

まるで母親の胸に抱かれているような心地良い眠りだった。

気が付くと瑞枝は家に戻っていた。

心配したと、親に酷く叱られ、そして抱きしめられた。

見回した先に、安堵した様子の大人達の姿が見えた。皆日に焼けてこつこつとした肌をしている。あの人は、どこにもいなかった。

きつと、向こうの世界に帰ったのだ、と瑞枝は不思議な気持ちでいた。

口の中が、まだ仄かに甘い。

「金盛さん」

呼びかけられて瑞枝ははっとする。

大旦那がちょうど包み終わった和菓子を持ってきているところだった。

瑞枝は会釈をして包みを受け取ろうとして手に金平糖を握ったままな事に気付く。

慌てて棚に戻そうとして大旦那に止められた。

「よろしければお持ち下さい」

「でも」

「いつも来て下さるお礼です。お持ち下さいませんか？」

瑞枝は微笑む。

「ええ、それでは遠慮無く」

大旦那も微笑んだ。

皺だらけの口のはしに小さなえくぼができる。

優しい顔。

どこか甘い匂いのする人。

瑞枝はもう一度お礼を言って店を出た。

雨の多い六月には珍しく綺麗に晴れた日だった。

上から降り注ぐ太陽は少し暑いくらいだ。

日傘を差して、紫陽花の花のような金平糖を口の中に放りこむ。

「ああ・・・甘い」

どこか懐かしい味がした。

金平糖は瑞枝の手のひらの中で、きらきらと宝石のように輝いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5927b/>

月夜に金平糖

2010年10月8日15時30分発行